日の丸の旗を掲げた「信濃丸」という大きな輸送船に乗船したとき、これで生きて日本に帰れるぞとみんな男泣きしたものでした。翌朝舞鶴港に上陸、衛生検査を受け、米軍のＧＨＱからッ連収容所の生活を厳しく調べられた後、「一金弐千円也」をもらって汽車で甲府駅まで戦友と一緒、甲府から大月を回って富士山の麓、父母の待つ内野に帰りました。

六、家族への遺言

戦争は絶対にしてはならない。人間皆、助け合い、平和を愛し、戦争をなくすよう心がけてほしい。

また、家内揃って頑健で、家じゅう仲よく誠実に暮らすことを望んでいます。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県　湯山太吾

一、出生から終戦まで

私は、大正六（一九一七）年十一月一日、神山富士の北麓・山梨県南都留郡忍野村内野で出生。村立忍野高等小学校を卒業後、東京麻布電気技師養成所の電気科卒業。昭和十六（一九四一）年九月一日、召集兵として東京赤羽通信隊入隊。直ちに戦時編成技師として満州国牡丹江温春第五二一部隊釘宮隊（無線通信隊本部付技師）に配属勤務することになり九月二十日頃、温春に着任しました。

昭和十七年九月、無線通信班長として任官後、牡丹江省温春において美徳電気株式会社（軍需工場）の工場長として軍用通信器機の製作部門を担当していましたが、昭和二十年八月十五日、天皇

陛下の終戦詔勅によって温春からチチハルに移動し、さらに第五二一部隊とともに満州里に移り、十月中旬頃、ソ連軍に武装解除され、そこで捕虜収容所に入りました。

二、タイセットで発電所建設技師として優遇される

収容所において第五二一部隊を主力とする千人単位の作業隊に編成され、「東京ダモイ（帰国だ）」と騙され、喜んで家畜輸送貨車（汽車）に押し込まれ、満州里からシベリア鉄道に入り、幾日もかかって降ろされたところはタイセットという大きな街でした。ここには大きな軍需工場、戦車、自動車工場、電気通信器工場等があり、一般の戦友は収容所から雑役人夫として作業場に出役されましたが、私や電気関係の通信技師であった市村義雄君（千葉県我孫子出身）等一組十人は電気技師として丁重に待遇され、毎日市内の建設現場の工事指導に巡回したり、大工場の電気安全機器の監視をしたり、日本の軍隊組織の中では考えられないような取り扱いをしてくれましたが、収容所に入れば生活は同じですので給与は悪く毎日空腹、入浴は一ヵ月一回、シラミは発生し、またログハウスの床に南京虫が夜中に出回って寝られないほどでした。

昭和二十二年五月頃、タイセットのネーベルスカヤに鉄道関係発電所新設工事が開始され、私ども日本人技師が選ばれて発電施設の設計組立等に当たりましたが、日本の技術については当時、ソ連より優秀なところがあり、収容所長も私どもの能力を認めてくれたり「ヤポンスキー、ハラショー」と褒められたものでした。「芸は身を助ける」とか、捕虜生活の中で一番よい待遇を受けられた私どもは運がよかったと今でも感謝しています。

三、ソ連への永住か、祖国への忠節か

私は、タイセット・ネーベルスカヤ第七建設所

において右鉄道関係発電所建設の建設技師としてスターリンの五カ年計画に参加し、立派な発電施設新築に貢献したということで、一緒にこのプロジェクトに参加した戦友技師とともにタイセット市長から表彰されましたが、収容所内では私どもに、技師はソ連国の科学的指導者になった以上、日本帰国は許されないのでソ連に帰化して永久居住しなさい」と勧められたこともありましたが、私どもは「我々は日本人だ、敗戦のため仕方なくソ連に抑留され、生きるために電気技師としてソ連国の建設工事に協力したのだから、任務が終われば日本に帰国して祖国再建に尽くすことが我々軍人の使命である。どんな苦労をしても必ず生きて日本に帰るのだ」と誓い合ったものでした。

昭和二十三年六月末、私どもが担当した発電所工事が完成し、七月十日早朝、収容所長から「発電所建設工事に参加した技師並びに第七工事収容所日本人全員、東京ダモイが許可された」と伝達され、皆で泣きながら喜び合いました。

翌朝、タイセット駅から例の有蓋貨車に押し込められ昼夜兼行でシベリア鉄道を南下、三日がかりでナホトカ港に着き下車。それから八月三十日まで「日本上陸のため共産主義革命の理論武装特訓をする」と称して「レーニン、スターリンの共産革命の歴史」とか「唯物論」という講義を聞かされたり「赤旗の歌」などを練習しました。

八月三十日、私どもは日の丸の旗をなびかせて入港した「永徳丸」という大きな輸送船に乗り込み、「ああ、これで生きて日本に帰れるぞ」と涙を流しながら翌九月一日、舞鶴港に入港、七年ぶりに祖国日本の土を踏みました。

舞鶴で一泊し、米軍のＧＨＱという情報部員に取調べを受けた後、郷里に帰ることができました。

四、子孫へ言い残したいこと

私は、七年間の軍隊生活とシベリア抑留生活の中で、人間の生命の大切さと人情の尊さをしみじ

み感じました。

最後に、言い残したいことを三つ挙げておきます。ぜひ守って下さい。

1　これから戦争は絶対にしないで下さい。

2　家庭では親を大切にして下さい。

3　自分の仕事に精出してよく働いて下さい。

以上申し上げて、私の労苦報告を終わります。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県　渡辺長治

一、出生から終戦まで

私は、大正九（一九二〇）年九月一日、霊峰富士の麓、山紫水明で名高い山中湖畔、山梨県南都留郡中野村山中で出生。村立山中高等小学校を卒業。昭和十七（一九四二）年一月十日、戦時召集兵として東京赤羽陸軍輜重兵第八六部隊に入隊。編成されて直ちに満州国間島省延吉の野戦貨物廠第二六四三部隊（輜重兵隊）に転入となり城子溝方面の警備に当たる。昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅は間島省延吉野戦貨物廠付近の警備中、部隊長から伝達されて聞きましたが、誰も信じられず、「日本が負けるはずはない」と思って警備していた私どもの貨物廠も、八月二十三日、ソ連軍の戦車に包囲され、戦わずして武装解除され、延吉市内の日本軍兵舎に捕虜として収容されました。

この延吉収容所には朝鮮・ソ連・満州三国境付近で警備していた関東軍の将兵が多かったためか、不思議にも隣村で忍野村出身の天野九二三君（上等兵）や渡辺喜三兄さん（曹長）に収容所内でばったり出会ったのには驚きました。八月末頃、突然ソ連軍命令が出され「日本兵は東京ダモイ（帰る）だ、軍装で直ちに営門集合」という命令に、「それ、帰国できるぞ」と喜んで整列すると、百人単位の作業隊を編成、千人単位で延吉からソ満国境を通ってシベリア鉄道の沿線まで一週